

# 文京学院大学・短期大学 GPA 制度の導入とその成果

櫻山義夫\*・松田浩平\*\*・坂本正裕\*\*\*

[要旨] 本研究は、2009 年度 1 年生から導入された本学 GPA 制度に関し、同制度導入以前 3 年間の全学にわたる学生成績評価データの数量的分析結果と導入初年度における同等データの数量的分析結果を比較することにより、GPA 制度導入の直接的効果と波及効果を明らかにすることを目的としている。導入以前に目標とした直接的効果が認められ、この制度の対象外である学年にも少なくない波及効果が見られた。また、本稿は全学 GPA 委員会の最終報告という性質ももつものである。

## はじめに

周知のように、文部科学省は大学改革の柱として学部教育から学士課程教育への転換を目指し、その学士課程教育の質を保証するために、個々の大学に自己点検・自己評価システムの構築を要請した。この質保証の一つとして厳密な成績評価を実現すべく GPA (Grade Point Average) 制度の導入も要請したのである。

文京学院大学・短期大学（以下、本学）における GPA 制度の導入に向けての歩みは、2008 年 3 月の中央教育審議会の審議報告<sup>1)</sup>を受け、2008 年 5 月に大学運営会議で全学 GPA 委員会を発足させたことに始まる。さらに、全学 GPA 委員会（以下、「委員会」）の要請を受けて、各学部の意見集約と要望取りまとめの役割を果たすものとして学部 GPA 委員会あるいはそれに類する委員会組織が設置された。

全学で統一的な GPA 制度を導入するとは言っても、学部ごとの目標や教育手法は大きく異なり、複数学科を持つ学部ではそもそも学科ごとにそれらは異なるものである。外国語学部および短期大学では、以前より外国人教員を中心として、日本式の絶対評価による成績の偏りを批判し、GPA 制度の導入を要望する声が強かった。また、外国からの留学生が提出する本国での成績表では多くが GPA による表記がなされており、本学から外国に留学する学生の成績表では便宜上単純換算による GPA 表記を併記することを実施してきた経緯もある。このことか

---

\* 教授／情報処理

\*\* 東北文教大学短期大学部人間福祉学科教授（元人間学部心理学科教授）／社会心理学

\*\*\* 東邦大学医学部客員講師（元人間学部心理学科教授）／教育心理学

ら、外国語学部と短期大学においてはGPA制度の導入に積極的であった。

しかし、他学部においてはそうことは簡単ではなかった。経営学部では、従来の日本的絶対評価でよしとする声が高く、保健医療技術学部や人間学部児童発達学科のように国家試験合格を教育目標の重要なポイントとする学部や学科では、その目標を見据えたカリキュラムが組み、全員合格を標榜するため、段階的成績評価より合格・不合格（パス・ノンパス）の二者択一的成績評価が中心となる。そして、パス100%を目指すことになる。すなわち、段階的成績評価とそれぞれの段階評価の全体に対する割合の指標を決めるという単純な描像では、全学統一的なGPA制度としては不適切であり、場合によって学部・学科の特色も消し去ってしまう危険性すらある。

委員会では、このような学部・学科の特色を生かしつつ、全学的なGPA制度の導入を目指すこととなった。すなわちこれは、全学統一的な部分と学部・学科に特徴的な部分からなるGPA制度を考えることを意味する。

本論文では、2009年4月から本学に導入したGPA制度の概略、およびGPA制度が最初に実施された2009年度新入生の1年間の成績データから成績評価パターンの解析をし、GPA制度の対象となっていない2年生の同年における成績評価パターン、さらには導入以前の成績評価パターンとの数量的比較分析をすることによって、GPA制度の導入と運用の効果を確認することを目的とする。

## 1. GPA 制度導入以前の成績データ分析

委員会では、本学に適した制度導入の前提として、成績評価の現状及び各学部の特徴を把握し、またGPA制度導入後のPDCAサイクルによる改善を施す基礎データとすべく、2005、2006、2007年度の各科目の成績評価得点を全学にわたって分析した。詳細については我々の前論文<sup>2)</sup>を参照されたい。結果は、以下のように要約できる。

1. 極端な評価の偏り（全員が優など）や履修者が12名未満の科目を除外したうえで、成績評価のパターンを求めるためクラスター分析を行った。ward法による階層的クラスター分析および評価得点（素点）の四分偏差の値と平均値を用いたk-means法によるクラスター分析の結果、各科目の成績評価は全学部を共通して4パターンに分析することができた(図1)。それらは、該当数順に適正型(52815)、高配点型(48646)、優秀集中型(17137)、低配点型(6894)である。ここでの該当数とは、3年間の延べ受講者数である。「適正型」は、正規分布に最も近く、委員会の「秀と優を合わせて約30%」という目標にも最も近いので、「適正」という語を使った。
2. 各学部・短期大学におけるこれら4パターンの占める割合は図2のとおりである。前論文において、この成績パターンの割合については文章による説明にとどめたが、ここでは図示することにする。成績評価の適正型の科目が全科目に占める割合は、最も高い経営学部

(54%) が 50% を超えているのみで、短大 49%、外国語学部 46%、人間学部 36%、保健医療技術学部 30% と 50% 以下であった。各学部・短期大学にカリキュラムおよび教育上の事情がそれぞれあるであろうが、この適正型が 60%～70% を占めるように GPA 制度を導入することが当面の目標となると委員会では考えている。

高配点得点型では、経営学部の 28% を別にすれば、他学部と短大はいずれも 40% 台であった。このタイプの成績評価は分布型としてはノーマルなので、成績評価基準を見直すことで適正型に容易に修正可能であると考えられる。また、低配点型も評価に対する教員の工夫や能力の向上によって適正型に近似していくものと考えられる。

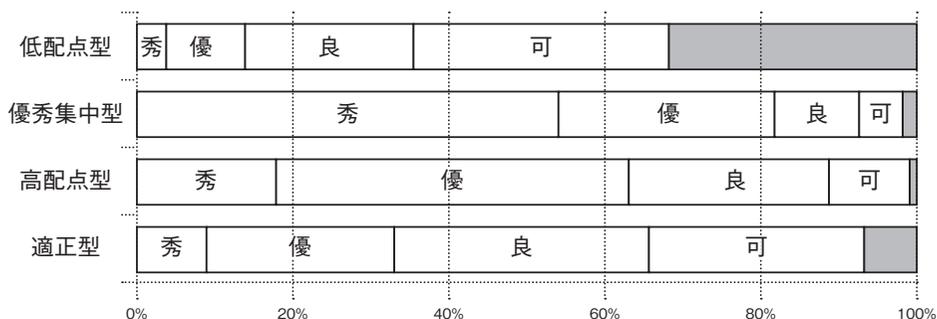


図 1 各クラスターの評価分布 (2005～2007 年度)  
(灰色部分は「不可」をあらわす)<sup>2)</sup>

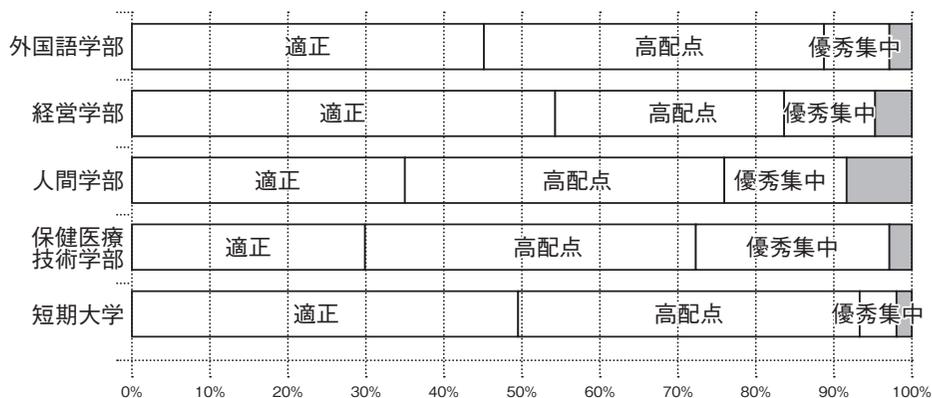


図 2 各学部・短期大学における 4 成績パターンの占める割合 (2005～2007 年度)  
(灰色部分は「低配点」をあらわす)

優秀集中型では保健医療学部が 23% と最も多く、次いで人間学部 16%、経営学部 12% であり、外国語学部 8%、短大は 3% であった。この科目群は分布型からすると、パス・ノンパス科目であるともいえよう。さらに受講者数における秀の割合が極めて高いため、GPA においては学部成績のインフレ化に最も寄与する科目群である。そのため、この型の縮小を図るとともに、どのように取り入れていくかが、GPA 制度成否の一つのカギになると考えられる。

## 2. 厳密な成績評価のための環境整備

前節の成績データの分析によって、各学部・短期大学が学生の成績評価において特有の構造的特徴をもっており、それが量的にどのようなものであるかが把握できたので、この特徴を生かす工夫をしながら厳密な成績評価システムを模索するという方向性を委員会は確認した。

厳密な成績評価システムとしてのGPA制度とは、学生が真剣かつ自主的に学ぶように仕向け、学習成果を多面的な手法によって教員が絶対評価をした結果、成績評価の1科目における分布が上記の「適正型」の分布内に収まるものであって、点数を分布の割合が辻褃合うように単純に相対評価をするようなものではないと我々は考えている。しかし、その実現には、学生の学習に対する制度としての環境整備と教員の評価能力の向上が不可欠となる。教員の評価能力の向上は、FD (Faculty Development) の重要なテーマであり、今後も不断に努力されるものである。委員会としては、本学のGPA制度に対する制度的環境整備として、以下のものを確認(既存の制度)あるいは要請(これから整備する制度)することとした。

### ①シラバスの統一(到達目標・指導方法・評価方法の具体的明記)

現状: Web システム Campus@venue の導入に伴い、全学的に共通フォームに統一されている。

対応: 各項目について、記述量等の差などは是正すべき部分は是正するよう、徹底する。これは、シラバスを通じ学生に科目の到達目標、評価方法等について前もって知らしめ、単位取得に必要な学習努力を自覚させるのに必要である。

### ②キャップ制の導入

現状: 保健医療技術学部はカリキュラム構成上の理由により馴染まない。その他の学部等は導入済み。現状通りで問題なし。これは、GPA との関係においては、多くの科目を履修登録し、途中で投げ出すという安易な学習態度を避けるための仕掛けである。特に、「不可」をとると GPA 値が下がることに注意が必要である。

### ③多様な評価方法の導入

現状: 各学部等において、それぞれの特性に応じて、実施している。

対応: 現状通りでおおむね問題はないが、より徹底を図りたい。ただし、複数の評価手法の組み合わせによってより厳密な評価を目指すのであれば、物理的かつ時間的にそれを可能にするための履修者数の制限や定員制を考えるべきであるが、教室数などの制約もあることから、当面、GPA との関連においては履修者数の上限は考慮しない。ただし、対策案として、出席簿管理や採点補助などを行なう「助手」(チューター、T.A. など)の配置を検討課題とする。

### ④履修取り消し期間の設定

現状: 未整備

対応: GPA制度の導入とともに、前後期それぞれに履修の取り消し期間を設定する。前期4月、後期9月に履修登録をしたのち、前期5月中旬、後期10月下旬を目途に取り消しを

可能にし、出席不足による「不可」を回避する機会を与えることを目的とする。ただし、この後出席不足等により「不可」になった場合、取り消しはできない。

### 3. GPA 制度の概要

2008年5月から2009年1月までの協議と調整を経て、委員会は以下の本学GPA制度導入を決定した。

文京学院大学・短期大学 GPA 制度

#### ①成績評価とグレードポイント

成績評価は5段階とし、以下の換算表に従ってグレードポイントを対応させる。

表1 評価とグレードポイント

評価	AA (秀)	A (優)	B (良)	C (可)	F (不可)
グレードポイント	4.0	3.0	2.0	1.0	0.0

#### ②GPA 値の計算

すべての科目についてグレードポイントの単位数による重み付け平均を求める

$$\text{GPA 値} = (\text{グレードポイント} \times \text{科目の単位数}) \text{の総和} / \text{科目の単位数の総和}$$

#### ③成績分布の考慮

成績分布対象科目においては下記の分布ルールを守ることとする。また、成績分布対象から除外される科目においても、この分布ルールに近づける努力をする。なお、成績入力にはWebシステムCampus@venueで行われるため、AAとAの合計が30%を超える場合は理由を入力しないと受け付けない仕掛けとする。なお、欠席過多により失格した学生は成績分布の対象としない。

AA (秀) 0～10% A (優) 20 ± 10% B (良) 40 ± 10%

C (可) 20 ± 10% D (不可) 0～20%

ただし、AA と A を合わせて 30% を超えないものとする。超える場合は、成績入力の際、WEB 上で警告がでるようにし、理由を明らかにする。

#### ④評価文字のみ記載（成績評価提出書類）

評価文字のみ記載とする。

#### ⑤GPA 対象科目と除外科目の設定

- (1) 原則としてすべての成績評価科目を GPA の対象とする。ただし、編入・留学等による認定科目（成績評価無し）および教職科目など卒業要件単位外科目は除外する。
- (2) 保健医療技術学部においては、カリキュラム構成上の理由により、必修以外の科目は

GPA 除外科目とする。

(3) Web 成績入力の際、編入学者や再履修者を識別できるようにする。

#### ⑥成績分布除外科目の設定等

GPA 対象科目において

(1) 履修者 15 名以下の授業は、成績分布除外科目とする。また、再履修科目、インターンシップ科目、外部実習科目、ゼミ、卒論および合格・不合格科目等も成績分布除外科目とすることができる。ただし、その合計単位数が GPA 対象総単位数の 1/3 を超えないものとする。

(2) 必修再履修科目の成績は A を最高評価とし (AA はつけない)、以前の成績を置き換える。

(3) 合格・不合格評価の科目は合格に 3.0 を付与する。

#### ⑦学部あるいは学年科目の取り扱い

複数学部の学生や異なる学年の学生が混在する科目では、科目全体としての成績分布を考慮する。ただし、事情により対応が不可能な場合は、学年あるいは各学部等を単位とした個別分布も認める。

#### ⑧成績分布データの公表

成績分布データは、学科平均を学内公開する。(個別データは学部長にのみ提示。)

#### ⑨制度の適用

この GPA 制度は 2009 年度新入生から適用する。

#### ⑩半期 GPA と通算 GPA

GPA の値としては、各半期ごとの値と入学時から通算した値の二つを計算する。再履修科目などは通算 GPA 値に反映される。

## 4. GPA 制度の検証

以上の内容で本学の GPA 制度は 2009 年度入学生から適用された。2009 年度 1 年間にわたるデータを使用し、我々の前論文<sup>2)</sup>において行った分析とまったく同じ手法を用いてクラスター分析を実施した。その結果を 1 章で示した 2005 年度～2007 年度の 3 年間の分析結果と比較し検討を加えた。結果は、以下のとおりである。

1. 2009 年度の各科目の成績評価は、全学年全学部を共通してやはり 4 パターンに分析することができた。それらは該当数順に標準型 (46581)、高配点型 (25931)、低配点型 (15470)、非定型 (1364) である (図 3)。ここでの該当数とは 2009 年度の全受講者数である。2005～2007 年度の結果 (図 1) と比較すると、適正型に対応する標準型 (GPA 制度導入後なので標準という言葉を使用する)、高配点型、低配点型の 3 パターンは 2009 年度も存在するが、優秀集中型は消滅し、ここでは「非定型」と名付けた秀・優・良がほとんど同じ割合に分布する型に移行した。これは、秀と優評価のインフレーションが収まったこと

を意味している。2009 年度においては、1 年生にのみ GPA 制度が適用され、2 年生以上は従来通りの成績評価方法によることを考えると、これは GPA 制度の本学全体の成績評価に対する波及効果とみなすことができる。また、すべてのパターンにおいて「不可」の占める割合が増加しており、成績評価が厳しくなったことが分かる。

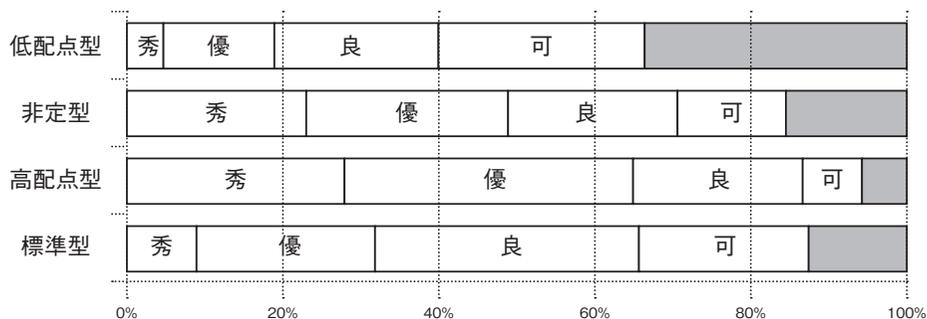


図3 2009 年度における各クラスターの評価分布（灰色部分は「不可」をあらわす）

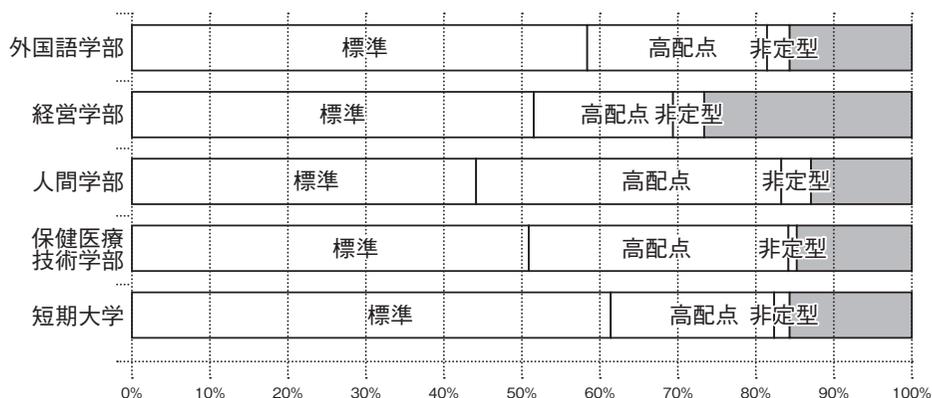


図4 各学部・短期大学における4成績パターンの占める割合（2009年度）  
（灰色部分は「低配点」をあらわす）

- 各学部におけるこれら4パターンの占める割合は図4のとおりである。ここで注目すべきは、全学年にわたる集計においても、経営学部を除き図2の適正型の割合に対して図4の標準型の割合が増加していることである。短大が49%から61%へ、外国語学部が46%から59%へ、保健医療技術学部が30%から51%へ、そして人間学部も36%から43%へとそれぞれ増加している。経営学部では、この割合に関してはほとんど差がなかったが、図2の優秀集中型がなくなり低配点型が増加した。これは、経営学部において成績評価が厳格化したと解釈できる。

次に、GPA制度導入の直接的効果を図るために、2009年度における各学部・短期大学の1年生および2年生における成績評価パターンの構成比を比較した。



図5 各学部・短期大学の1年生と2年生における4成績パターンの占める割合 (2009年度)  
(灰色部分は「非定型」をあらわす)

図5から明らかなように、1年生のほうが2年生の成績評価に比べ標準型が多く、1年生における標準型の割合が外国語学部76%、短大73%、人間学部62%、経営学部60%とGPA制度導入の目標値をクリアしている。保健医療技術学部は50%にとどまったが、これはやはり全科目の90%以上が国家試験合格を目標とする必修科目であるというカリキュラムの特殊性の反映と見なすことができる。

## 5. おわりに

以上の結果から、本学のGPA制度の導入は期待した直接効果と未導入学年に対する波及効果が認められると考えられる。もちろん、この制度が本学にとって最終的なものではない。今後、実績の蓄積と分析によって常に改善していく必要は当然であろう。最後に、いくつか考察すべき点を挙げておきたい。

2章において、厳密な成績評価システムとしてのGPA制度とは、学生が真剣かつ自主的に学ぶように仕向け、学習成果を多面的な手法によって教員が絶対評価をした結果、成績評価の1科目における分布が上記の「適正型」の分布内に収まるものであって、点数を分布の割合が辻褄合うように単純に相対評価をするようなものではないと我々は考えている、と述べたが、これは、「学生の成績分布は厳密かつ正確に評価すれば正規分布に近づく」という考えを前提と

している。この仮定は多くの場合経験則として正しいが、対象となる集団が特殊な事情を持つ場合、当然正規分布からのずれが大きくなる。それが、本学においては保健医療技術学部や人間学部児童発達学科の場合に相当する。GPA 制度にはその本質として成績評価の標準化という面があるが、そこに各学部のもつ特殊性をどのように組み込んでいくかという問題をいかにより良い形で解決していくかということがこれからの改善のポイントとなる。

次に、GPA 制度の実を上げるためには、いかに教員および学生にこの制度について理解してもらおうかということも重要な点である。言い換えれば、教員と学生にこの制度についてどのような内容と手段で伝達するかということ工夫する必要がある。教員には、「教員用手引書」を作成し配布している。2009 年度に配布した手引書を Appendix に収録しておいた。この手引書で、GPA 制度導入の背景と制度の説明、さらには制度に関する留意点を詳しく周知している。

ただし、文書配布だけではかなりのエラー率を覚悟しなければならないので、Web 成績入力システム Campus@venue において、Web ユーザインタフェース上で入学年度（学籍番号）による成績入力表現（評価記号か点数か）の区別、成績評価分布に関して「AA」と「A」評価の合計が30%を超えるかどうかをチェックし、エラーの場合は入力を受け付けない機能を持たせた。

ただし、成績評価分布除外科目もあるので、「AA」と「A」評価の合計が30%を超える場合はその理由を記入することで回避できるようにした。このWeb ユーザインタフェースのおかげで、かなり基本的なエラーは回避されたと考えている。学生に関しては、新入生ガイダンスのときにやはり「学生用手引書」を配布し詳しく説明をしているが、高校までの相対評価の経験からあまり戸惑いはなさそうである。「学生用手引書」も Appendix に収録してある。

最後に、このようにして得られた各学生の GPA 値を学士課程教育の質保証にいかに関与しているのかという観点であるが、他大学でどのような活用が行われているのかという調査を行い、我々の前論文<sup>2)</sup>にまとめておいた。本学においても、奨学金や留学条件等々、いままで点数で与えられていた各基準が GPA 値に置き換えられていった。ただし、基準値としてどの GPA 値が適切かは、簡単に決められることではない。各基準において適切な GPA 値を決める判断の根拠としても、本論文で示したデータ分析は役に立つと考えている。また、GPA 制度は多くの大学で導入されてきたが、その効果について数量的解析を行って公表された例は少ない<sup>3)</sup>。その意味でも、本論文が GPA 制度の考察に関し、少しでも貢献できればと願う次第である。

## Appendix

### 1. 2009年度発行教員用手引書

#### GPA (グレート・ポイント・アベレージ) 導入について

2009年度新入生から、自らの学業成績の状況を的確に把握して、適正な履修計画とそれに基づく学習に役立てるため、GPAを導入します。導入に伴い先生方の成績評価の方法、成績入力等が変更になりますのでお間違えのないようお願いいたします。

※2年生以上は、従来通りの点数での成績入力のままです。

#### GPA 成績評価の方法について

背景 → 学生の多様化、学生の品質保証

成績評価を綿密に行う必要性 ⇒ 主たる効果 → 授業への動機付け

副効果 → 成績への問合せ・クレームの増加

※成績評価の問い合わせに対し、説明責任を果たす必要がある。

#### (1) 成績評価を行う際の留意点

- ・シラバスで示した成績評価項目の比率に従って評価をお願いします。
- ・多様な評価方法により評価をお願いします。多様な評価方法は、定期試験、定期試験レポートだけでなく、他の客観的資料（出席回数、小テスト、レポート、授業中に実施する課題など）で評価することが望ましいと言えます。
- ・定期試験、定期試験レポートは学習目標に沿った出題内容にして下さい。なお、レポートを提出する際、どの様に採点するか基準を示して下さい。

#### 採点基準を明確にする背景

最近では学生の多様化などから、より適正かつ厳密な評価を下す必要性が生じてきました。授業を受けた学生の「品質保証」としての意味はもちろんのこと、甘い評価は努力した学生から不興を買い、そうした学生の学習意欲を下げてしまうこととなります。学習目標の最低ラインに達していない学生には単位を認めないことが原則となります。ただし、厳しすぎる評価も学生の学習意欲を下げることにつながりますので注意が必要です。

厳密に成績評価すると、学生からクレーム、質問等の増加が予想されますが、成績評価している以上、教員として説明責任を果たす必要が出てきます。そのためにどのように成績評価しているか基準を明確にしておく必要があるのです。またどのように評価しているか学生に伝えることは、学生に合理的な学習を促すことにもつながります。

1) 成績評価

学修の評価は、AA、A、B、CおよびFとし、AA、A、B、Cを合格とし、Fを不合格とします。合格した場合は、その授業科目所定の単位が与えられます。評価は、評価文字（AA、A、B、C、F、1（試験欠席）、2（1/3以上欠席、受験資格なし））にて入力願います。

2) 評価の基準を次のようにします。

判定	成績表示	成績評価基準	GP	成績評価内容
合格	AA	90～100点	4.00	特に優れた成績
	A	80～89点	3.00	優れた成績
	B	70～79点	2.00	妥当と認められる成績
	C	60～69点	1.00	合格と認められる成績
不合格	F	59点以下	0.00	合格と認められる成績に達していない

3) 成績分布の考慮

AA(秀) 0～10%、A(優) 20±10%、B(良) 40±10%、C(可) 20±10%、F(不可) 0～20%  
ただし、AAとAを合わせて30%を超えないものとします。超える場合は、成績入力の際、Web上で警告が出ますので、無視して入力した場合は理由書を提出願います。

(2) 授業への取り組みの評価方法

従来、授業へ出席することを授業への取り組みとして評価することもありましたが、授業に出席しているだけでは、私語、寝ている、いわゆる内職を行うなど授業に集中せず、実際の授業参画と評価が離れてしまうことが考えられます。

授業参画度を測るには次の様な方法が考えられます。

知識や基本的な考え方		技能の習得
教養科目	専門科目	
[予習小テスト] テキストのページを指定するなどして、授業前に学習させ、その成果を問うようなテストを授業開始時に行う。実施後は相互採点させるなどして回収する。	[予習小テスト] ←教養科目参照	[基本課題] 初学者でも十分に実施できる課題、もしくは教員のインストラクションの元を実施する課題を授業時間内に行う。授業時間外に提出した場合は評価をマイナスする。ただし、欠席時にも2分の1程度のプラスを与えることにより、フォローアップさせることが望ましい。
[理解度テスト、授業の振り返り] その時間に講義した内容を小テストで確認する。実施後は相互採点させるなどして回収する。	[理解度テスト、授業の振り返り] ←教養科目参照	
[ミニペーパー] 授業で学習したことを数分程度でまとめさせる。	[ミニペーパー] ←教養科目参照  [質問・発言] 授業内での発言、質問などを記録し、あるいは記録させ点数化する。	

(3) 達成度の評価

達成度を評価するには、応用課題、レポートを課す、試験（筆記試験。実技試験）を行う方法があります。

知識や基本的な考え方		技能の習得
教養科目	専門科目	
<p>[定期試験] 最終的な達成度の評価として定期試験を行う。学習目標に沿った出題をする。</p> <p>[定期試験レポート] 最終的な達成度の評価として定期試験レポートを出題する。設問は学習目標に沿ったものとする。また出題を工夫することにより、インターネットなどからの剽窃が発生し難い様配慮する必要がある。また評価基準を明らかにすることにより、学生が良いレポートを書くための指針が得られるようにする。また評価結果に納得し易い様に配慮する。</p>		<p>[応用課題] 授業で得た知識を活用して解く課題を与える。授業時間外に行う。基本課題が授業中に完成してしまった学生には、授業中から取り組んでも良いこととする方法もある。</p> <p>[定期試験] ←知識・基本的な考え方参照</p> <p>[定期試験レポート] ←知識・基本的な考え方参照</p>

(4) 予習小テスト、理解度テスト、レポート採点基準など

出題の工夫

- 1) レポートのテーマは、授業の確認あるいは学習したことを使って書けるような内容にする。
- 2) 自分で調べる、自分の足で見て回る、自分の頭で考える、など自分自身の力で書くように工夫する。例えば、細かい枝間を出し、インターネットの丸写しが出来ない様にする、等。

評価

1) 評価チェックポイント

- ・ 自分の意見がきちっと書いてあるか
- ・ 説明が論理的か
- ・ 参考文献を読んでいるか
- ・ 書誌事項や体裁がきちっとしているか（参考文献リストや URL（含む検索年月日）が書いてあるか、など）

2) 評価基準

AA 評価： 複数の参考文献を調べた上で、独自の考え方が論理的に展開されている。実態調査であれば、自分の体験を客観的に見ることが出来、他の例なども参照して結論が書かれている。

A 評価： 参考文献が1冊以上あり、内容がまとまっており、かつ自分の考えが明確に述

べられている。

B 評価： 学習した内容は十分理解している。自分の考えも述べられているが、内容が平板である。

C 評価： 学習した内容の理解は最低水準に留まっている。自分の考えも述べられているが、単なる感想に過ぎない。

F 評価： 学習内容はごく一部である。量も不足、単なる感想文に過ぎない。

#### (5) 成績分布データの公表

成績分布データは、学科平均のみを学内公開します。（個別データは、学部長のみ提示）

## 2. 2009 年度発行学生用手引書

### GPA（グレート・ポイント・アベレージ）導入について

2009年度新入生から、自らの学業成績の状況を的確に把握して、適正な履修計画とそれに基づく学習に役立てるため、GPA を算出します。導入に伴い成績評価、成績通知表、成績証明書等の記載が変更になります。

#### 1. GPA

##### 1) 成績評価

学修の評価は、AA、A、B、C、およびFとし、AA、A、B、C、を合格とし、Fを不合格とします。合格した者には、その授業科目所定の単位を与えます。

2) 評価の基準を次のようにします。

判定	成績表示	成績評価基準	GP	成績評価内容
合格	AA	90～100点	4.00	特に優れた成績
	A	80～89点	3.00	優れた成績
	B	70～79点	2.00	妥当と認められる成績
	C	60～69点	1.00	合格と認められる成績
不合格	F	59点以下	0.00	合格と認められる成績に達していない

##### 3) GPA 対象科目

- ①卒業要件に参入できる科目
- ②5段階評価によって成績を認定する科目
- ③学生が履修登録した科目

したがって、他学部、他学科履修科目は、対象科目となり、卒業単位外科目、教職科目、認定科目等は対象外科目となります。

#### 4) 対象外科目

※各学部学科で表示

#### 5) GPA の算出方法

[学期ごとの GPA 算出方法]

学期ごとの GPA 算出は、次の式によります。

$$\frac{\text{(当該学期で履修登録した GPA 対象科目の GP} \times \text{その科目の単位数) の合計}}{\text{当該学期で履修登録した GPA 対象科目の単位数の合計}}$$

当該学期で履修登録した GPA 対象科目の単位数の合計

- ・ GPA は少数第 3 位を四捨五入し、少数第 2 位までを表示します。
- ・ GPA 対象科目で F (不可) は、分母に含みます。
- ・ 通年科目は後期に含め GPA を算出します。
- ・ F (不可) となった科目を再履修した場合は、再履修した当該学期の対象科目に含め、GPA を算出します。
- ・ 前項の場合、F (不可) となった学期の GPA は変更しません。

[通算 GPA の算出方法]

通算 GPA 算出は、在学中に (評価がでた時点) 履修登録したすべての GPA 対象科目に基づくものであり、その算出方法は次の式によります。

$$\frac{\text{(在学中 (評価がでた時点) に履修登録した GPA 対象科目の最新 GP} \times \text{その科目の単位数) の合計}}{\text{(在学中 (評価がでた時点) に履修登録した GPA 対象科目の単位数の合計}}$$

(在学中 (評価がでた時点) に履修登録した GPA 対象科目の単位数の合計

- ・ GPA は少数第 3 位を四捨五入し、少数第 2 位までを表示します。
- ・ GPA 対象科目で F (不可) は、分母に含みます。
- ・ 通年科目は後期に含め GPA を算出します。
- ・ 再履修した場合は、1 科目としてカウントします (ダブルカウントしません)。
- ・ 再履修した科目の GP は、最新の評価に基づく値とします。

## 2. 卒業要件

卒業するための要件については、学則通り所定の条件単位数を満たすこととし、GPA については、学生指導、表彰制度等に使用するものとします。

## 謝辞

本論文は、本学GPA委員会を代表して3名の連名で投稿したが、本学のGPA制度が誕生するためには、他の多くの方々の協力と努力が必要であった。全学GPA委員、各学部委員、協力いただいた事務局、その他この制度の導入に尽力いただいたすべての方々に心より感謝したい。

## 注

- 1) 中央教育審議会大学分科会制度・教育部会『学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）』平成20年3月25日
- 2) 松田浩平、坂本正裕、櫻山義夫（2009）「文京学院大学・短期大学の成績データ分析と他大学 GPA 制度との比較研究」文京学院大学人間学部研究紀要第11巻1号
- 3) 例えば、豊田雄彦、市田博（2007）「GPA 制度の導入による適切な成績評価」自由が丘産能短期大学紀要第40号、はその一例である。

(2012.10.12 受稿, 2012.11.15 受理)